
鯉王の躍動

CROW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鯉王の躍動

【Nコード】

N2708Y

【作者名】

CROW

【あらすじ】

町で最も弱いポケモントレーナーと

最弱と評されるあのポケモンが織り成す

ちょっと熱い物語。

ここには語られることのない伝説がある…。

プロローグ（前書き）

久しぶりに執筆してみました。文章におかしいところや変なところが無い様に

留意しているつもりですが、何かありましたらご指摘いただくと幸いです。

それよりも問題なのは、ちゃんと連載できるかという面か…。

プロローグ

それは、テッカニンの声が騒がしい夏の日のことだった。

退屈な学校の時間の束縛から逃れ、夏休みに入って胸が踊っていた僕は今日も一人外へと出かけ、近所の子供たちが行っている

ポケモンバトルを見に行った。いつもの広場に到着すると、

辺りの空気が張り詰めているのを感じた。そこには子供同士のお遊びの様な生易しい空間は広がってはいない。

ただ、勝負の世界が広がっているだけだ。

僕が広場にやってきたこと気が付いたのか、誰かがこちらへと近づいてきた。

「お、タケル来たか」

そう僕を呼んだのはこの町のガキ大将のケンタ。

この辺では、クチバのケンちゃんとして僕達から一目置かれる存在だ。

ガキ大将と言うと悪いイメージがあるかもしれない。

ただケンちゃんはとてもいいやつだ。

他人に暴力をふるったり、威張り散らしたりしない。いじめなんて以ての外、

見つけたら許さない。とにかく正義感が強い少年だ。

「そういや、まだお前ってポケモンを持ってないのか」

「うん、まだ」

「そろそろ親にモンスターボールの一つくらい買ってもらえよ。いつも、見てるだけじゃあ詰まらないだろ？」

「まあ、そうだけど…」

僕はポケモンを持ってはいなかった。それには少し訳がある。

僕の母親は近所にあるポケモンだいすきクラブに所属していてポケモン同士を

戦わせることを嫌っていた。ポケモンは可愛がる生き物だと主張して

僕にポケモンを渡すことに賛成していないのだ。もし僕にポケモンを渡したならば

必ずやポケモンを戦わせてしまう。そんな懸念事項がある限り、母親が

ポケモンを持たせることに賛成することはない。

まるでどこかの団体がホエルコやホエルオーは見るものであって、戦わせるものではないと訴える様に。

そうなつてくると頼れるのは父だけだが

父の説得も母の耳には届かないらしい。

僕がポケモントレーナーになるという道はこの障壁を

乗り越えなければ達成できないのだ。

「ポケモンだいきクラブだか何だか知らねえけど、ポケモンは可愛がるものだ！

なんてそんな女々しいことだけをやってられるか！バトル、流れ出る汗。

そしてトレーナー同士の友情。それがポケモントレーナーの生き方つてもんだろ！

そして、そうすることで初めてポケモンに愛着が湧いて可愛がることができるんだ！ なあ、そうだろタケル！」

突然、ケンちゃんがポケモンについて力説し始める。僕はその勢いに押され

ただただ頷くことしかできなかった。

「ケンちゃん。とつとバトルの続きをやるうぜ！ 俺達、待ちくたびれたぜ」

広場の仲間たちが退屈そうにそう漏らす。そういえば、今はポケモンバトルの真っ最中だった。

「おお、悪い悪い。今行くぜ。まあ、タケル。

お前がポケモンを持てるようになったらバトルしような」

ケンちゃんは僕にそう言うと、広場の仲間たちのところへ戻っていた。

”ポケモンを持てるようになったらバトルしような”

この台詞を聞くのもこれで何回目だろうか。
ポケモンを持てるようになったら、その条件が満たされるのはいつの日なのか。

僕がここで彼らと熱いバトルを展開できる時が来るのか。

そんな不確定な暗い感情は広場の仲間たちの白熱したバトルによって何処かへと消えた。

いつの間にか自分もその仲間の中に混じって、
時間が経つのも忘れて一緒に盛り上がった。

気が付くと空は真っ赤に染まっていた。夕方になっていたのだ。

「もう夕方が。お前ら解散するぞ」

「えー！？もう解散？もう少しバトルしようぜ」

「あのなあ、夕方には帰るのが決まりだろ。ほら撤収撤収」

「ケンちゃんは早くお母さんに会いたいんだよ。だからこうして早く解散するんだよ」

「やーい！マザコンのケンちゃん！」

「何だと。もう一回言ってみろ！」

そんなやり取りを聞いていた僕は思わず笑ってしまった。

「何だよ。タケル。お前まで俺のことを笑うのか」

「いや、そうじゃないよ。ただ、何かこうして皆でいるのって楽しくてさ」

自分でも臭いセリフなんじゃないかと思った。けれど、皆の心を温かくさせたことに

違いはなかった。僕は広場の仲間やケンちゃん達にサヨナラをする
と家路についた。

夕方だというのにまだテツカニンが五月蠅く鳴いている。

それもとてもとても楽しそうに。

プロローグ（後書き）

ガキ大将のニュアンスがややおかしいかもしれない。

一目置かれていると言われている割にはケンちゃん結構仲間たちからかわれている様子。

まあ、皆のまとめ役という人物とでも思っていてください。

プロローグ2（前書き）

人の台詞を書くのが苦手だ…。
自身の人間経験が足りてないからなのだろうか…。

プロローグ2

帰宅すると、母親が夕食の準備をしていた。

「今晩はカレーライスなのだろうか。」

台所の方から良い匂いが漂い、僕の嗅覚を刺激する。

「あら、タケル。おかえりなさい」

「うん、ただいま」

「今日も近所のポケモンバトルを見に行ってたの？」

「ああ、またか。母は僕の帰宅が遅いと決ってこう尋ねてくる。」

「いや、見に行つてないよ。今日は友達の家でゲームをした」

「そう。ならいいんだけど…。タケル、もし、友達に誘われても」

絶対にあの野蛮な遊びを見に行つちゃ駄目よ。ポケモンは

可愛がる動物であつて戦わせる生き物じゃない。タケルだつて分かるでしょ？」

「いいや分からない。そう言おうものなら後でこつ酷く叱られることだろう。」

僕の喉元まで出かかった母親に対する不満はぎりぎりのところで引っ掛かり止まった。

「全く。あんな、野蛮な行為を子どもたちにもたちにやらせるなんて他の親の教育は」

どうなつてるのかしら。役場の人にポケモンバトルを禁止する条例を作つてほしい

と何度もお願ひしているのに、誰もちゃんと話を聞いてくれない。

「ほら、貴方も言つてやってくさいよ。役場の人に、こうガツンと」

変なスイッチが入つたのか、母はポケモンを戦わせることに

関する批判を捲し立て始める。

母がどうしてここまでポケモンバトルを唾棄するのか。

それには、高校時代の出来事が関与しているらしい。

母の通つていたクチバ商業高校はクチバシティ唯一の商業高校だつ

た。

この頃は、今の様にポケモンバトルを忌避することではなく寧ろポケモンバトルを見るのを楽しんでた。

しかし、そんな母の倫理観を大きく歪めてしまう事件が起こった。それは学校でのいじめだった。母自体はいじめに遭わなかったらしいのだが

クラスメートが苛められるのをクラスで毎日見せつけられる。それがとてつもなく苦痛だったことは想像に難くない。

この時の経験がポケモンバトル嫌いを生んでいるかは分からない。ただ、言えることは戦いで傷ついたポケモンと苛められているクラスメートとを照らし合わせているのではないかと僕は考えている。

だが、唯それだけならばここまで異常なほど批判するような人間にはならない筈だ。

単なるポケモンバトル嫌い。それだけで終わる筈である。恐らく母に一番影響を与えたのはこの事件ではないだろうか。

”クチバ連続ポケモン殺傷事件”

過去にクチバシティで起きた猟奇的な事件である。

当時中学二年生の少年が町のポケモンを次々と惨殺し、社会問題となった事件で、当時マスコミはこの少年がポケモンバトルに

夢中になっていた点を取り上げ、あられもない非難をしたのだそうだ。

その為、この事件を目の当たりにした世代の多くはポケモンバトルを嫌っている。

その嫌悪感が母は人一倍強いのかもしれない。

「本当にポケモンバトルなんて無くなってしまうばいいのに…」
母は未だに、愚痴をこぼしている。その日の夕御飯がいつもよりも気まずいものになったのは言うまでもない。

プロローグ2（後書き）

マスコミやら事件やら色々と詰め込みすぎましたね。ただ、例え創作の世界だからと言って世界を美化したりはしません。現実世界同様に色々と事件や問題は存在します。

プロローグ3(前書き)

土曜日に一気に投稿しようかと思っていましたが

少し面白みがないのと同時に面倒なので投稿することにしました。

しかし、プロローグが長すぎるのは考えもの。

これなら、プロローグを本編として組み込めば良かった…。

プロローグ3

夕食を終えると、この険悪な雰囲気から早く逃れる為に
一目散に部屋へと駆け込んだ。そうして部屋の電気を付け
ベットにバタンと倒れ込むと、僕はほっと胸を撫で下ろした。
食事中の居心地の悪さは尋常ではなかった。

母は相変わらず、バトルの批判をするし、そんな母に対して
父が文句を言ったりと、出来ることなら耳を塞いでいたかった。

”ポケモンを持てるようになったらバトルしような”
ふと、ケンちゃんに言ったことを思い出した。

無理だ…。僕がポケモントレーナーになるなんて妄想でしかない。

ごめんケンちゃん。その約束は果たせない…。

母親を何とか説得したい。けれども出来ない。

この二項対立を何とかすること。その方策が見当たらない。
少しの間、どうしたらその状況を打開できるかについて考えていたが
いつの間にか僕は眠り込んでしまった。

その日、僕は夢を見た。それは僕が何かぴちぴち跳ねているポケモ
ンと

共に友人達とポケモンバトルをしている夢だった。そいつは強かつ
た。

次々と相手を薙ぎ倒していく。相手のコラッタのでんこうせつかが
僕のポケモンに
突き刺さる。けれどそれにも全く動じず、果敢に立ち向かい、相手
のコラッタ目掛けて

思いつきり体当たりを繰り返した。コラッタは、体をふらつかせる
も何とか踏み止まり、

次は、体当たりを仕掛けてきた。すると、今度は空高く大きく飛び
跳ね、体当たりをかわし

目標に向かって思いっきり自分の尾びれを叩き付けた。それが決め手となって

僕とその赤くてぴちぴちしたポケモンは勝利を収めた。

「ピピピピピピピピピピピピピピピッ」

目覚ましの音が朝の訪れを告げる。昨日、歯磨きをしないで眠り込んでしまったことに少し憂鬱になりながら、ベットから重い体を起こし

小さく深呼吸した。そうして僕は部屋を出た。寝惚け眼で部屋から出てきた

僕が一体どんなに浮かない顔をしていたかは分からない。

けれど、又ケニンに魂でも吸い取られたかのような生気を失った顔をしていることに相違なかった。

リビングの方へと足を運ぶと、そこには新聞を読みながらコーヒーを飲む父と、

朝食を作る母の姿があった。まるで、昨日の夕食の重苦しい空気が嘘であったかのようにリビングには平和な時間が流れていた。僕は椅子に座ると、

リモコンを手に取り、テレビを付けた。

すると朝のニュース番組が放送されていたのでそれを見た。

『政府 世界ポケモン保護会議に参加』

『クチバ水族館で世界初ヒンバスの養殖に成功』

『夏の旅行にお勧め。カントー観光スポット特集』

寝起きの動かない頭で、ニュースを見ていたせいかな。どの内容も然程頭には残らなかった。

「タケル。お前、もうすぐ誕生日だろ。何か欲しいものはないか？」僕がニュースを見ていると、父が突然そう訊いてきた。

夏休みに突入し、心浮かれるあまり自分の誕生日のことを忘れていた。

父の唐突な質問に、少し困惑した僕はちよつとの間考えてから

いや、まだ決めてないとだけ父に伝えると、父はそうかとぼつりとつぶやき、何でもいいけど早く決めておけよと付け加えると再び新聞を読み始めた。

「タケルの好きなものなら、どんなものでもプレゼントするけど…ポケモンは駄目よ」

急に母が話に割り込んできた。何としても僕にポケモンを持たせまいと必死なのか、始めからほしいものの候補の中にポケモンを入れる気はないらしいかった。

「母さん、タケルももう12歳だ。世間的には大人と呼ばれてもいい年代だろう。」

そろそろ、ポケモンの一匹や二匹持たせたってこれといった問題はないんじゃないか？」

「私はこの子にポケモンを持たせることにはもちろん反対しないわ。ただ、ポケモンバトルだけはすると言っているだけなのよ。」

けどね、父さん。この子にポケモンを与えたらね。どうなるかしら。絶対にバトルさせるでしょう？私達が与えたポケモンが

バトルによって傷ついて苦しむ姿を考えたら…もう私は私は…」

「バトルはそんなに危険なもんじゃない。それにバトルをさせたつて、

一定の倫理ぐらいこの子にもあるだろう。母さんはタケルを信じてあげられんのか！」

朝の爽やかな雰囲気が一変、辺りに不穏な空気が流れ始める。

「信じてあげられない訳じゃないわよ！」

「だったら…！」

「もういいよ！」

父と母の口論に嫌気が差したのか、僕は思わず叫んでしまった。

「僕、ポケモンを見てるだけでいい。それでも十分楽しいから…。」

だから、ポケモンは我慢するよ…。そんなことより僕は父さんと母さんが喧嘩している方がもつと嫌だから…。」

「タケル……」

その後の朝食は、家族全員が一言も話さず、沈黙の時間が流れた。そんな状況で食べ物が喉を通る訳もなく、結局ほとんど食べずに自室へと戻った。

大層嫌な思いをした割に僕はやけに冷静だった。

もしかしたら自分は今までに一度もポケモンが欲しいなどと思っただことがなかったのかもしれないと勘違いしてしまうほど僕は平静な態度を貫いていた。僕は思わず笑ってしまった。

いや、こう言つと少し語弊があるかもしれない。

正確には自然に笑ってしまったと言う方が適切だろう。

何も考えることが出来ず、ベットに倒れ込む。

寝転んだまま、しばらくぼんやりとした後、部屋の周りを見渡すと視界がぼやけて見えなくなっていた。いつの間にか僕は泣いていたのだ。

何とか自分を落ち着かせようと、僕はテレビの電源を入れた。朝とということもあつてか

どこのチャンネルもニュースばかりであつたが、暗い気持を少しだけ明るくする手助けにはなつた。僕の涙が止まり始めた時、突然部屋をノックする音が聞こえた。

父だろうか、母だろうか。しかし、

一体どんな用があつて僕の部屋をノックしたのだろうか。

僕は訝しく思いながらドアを開けた。そこには、父と母の姿があつた。

プロローグ3（後書き）

話を早く進めようと少し焦っているのか
同じような場面が二つ並んでしまいました。
すみません…。さて、次回ついに本編に突入します。
ようやくか…といった感じですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2708y/>

鯉王の躍動

2011年11月10日01時16分発行